



Report on research

食の簡便化志向の 傾向強まる 20歳代は パンよりごはん

—2016年度上半期 消費者動向調査—

消費者の食の志向はどのように変化しているのか、また消費者の食料・農業に対する意識・意向はどうなっているのかについて、昨年7月に実施した消費者動向調査で特徴が浮かび上がりました。そのポイントをご紹介します。

ところが今回の結果では、20歳代の「健康志向」は30歳代よりも高く、逆に「経済性志向」「簡便化志向」では30歳代よりも低くなるという結果が見られました(図3)。

このことから、最近では、30歳代よりも20歳代の若者の方が「経済性や簡便化よりも、健康に気を使う」傾向があることがうかがえます。

国産食品は安全、おいしい

食料品を購入するとき、あるいは外食するときには国産品かどうかを気に掛けるかどうか聞いたところ、食料品購入時に「気に掛ける」は七六・六%となりました(図4)。前回調査よりわずかに低下しています

が、依然高い水準を維持しています。一方、外食時に「気に掛ける」は三八・一%となりました。

国産原料の食品と輸入食品に対するイメージを聞いたところ、国産食品の価格では「高い」が六九・二%と、輸入食品に比べ高価であるイメージを持たれているものの、安全面では国産食品が評価されており、「安全である」が六九・九%と、前回調査より〇・五ポイント上昇しています(図5)。

さらに、おいしさ、見た目についても国産食品が評価されており、

「おいしい」が六三・二%、「色・形がよい」が四七・三%と輸入食品を大きく上回っています。

輸入食品と比べ、どのくらいの価格レベルまでなら国産食品を選ぶか、いわゆる価格許容度を聞いたところ、「割高でも国産品を選ぶ」が六一・四%と、前回調査(六二・八%)からわずかに低下したものの、依然六割を超える高い割合となりました(図6)。

消費者は、国産食品に対して、安全で高品質なイメージを持っており、輸入食品と比べて割高にはなるものの、できるだけ「国産食品を選びたい」という意識・意向が高いことがうかがえます。

食へることへの関心度や食生活の実態

世代により関心理由に差

日常生活における「食へること」への関心度を聞いたところ、全体で「大いに関心がある」は二六・五%となり、「関心がある」は三三・五%、やや関心がある「二二・二%を含めて「関心がある」とした人は、八割を超える結果となり、消費者の「食へること」への関心が高いことが分かりました(図7)。

関心がある理由として、全体の五六・九%が「おいしいものを食べる

この消費者動向調査は、消費者の食や農業に関する意識・意向を把握するため、日本公庫が毎年二回、実施しているものです。

このうち二〇一六年度上半期調査では、毎回実施している「食に関する志向」の他、現在の日本の食生活において、食の外部化・簡便化、米の消費減少などのさまざまな変化がある中で、今後見込まれる国内の「食」のニーズを捉えるため、食生活の実態などについて調査しました。

食に関する志向

「健康」は二期連続最多

消費者の現在の食の志向について、「健康志向」は四一・六%で、前回

調査(二〇一六年一月)から〇・一ポイント低下したものの、二〇一〇年二月の調査以降、二期連続で最多回答となりました(図1)。次いで「経済性志向」が三五・三%、「簡便化志向」が三一・六%の順となっています。

これら現在の食の志向における「健康」「経済性」「簡便化」の三大志向の推移を見てみると、「健康志向」は、一〇年度ごろから上昇し、その後一貫して高い割合で推移しており、健康第一であることが分かります。また、簡便化志向が高まる傾向が続いています(図2)。

一般的に「健康志向」は高齢世代、「経済性志向」と「簡便化志向」は若年世代に集中すると考えられます。

図3 年代別現在の食の志向 (2つまで回答)

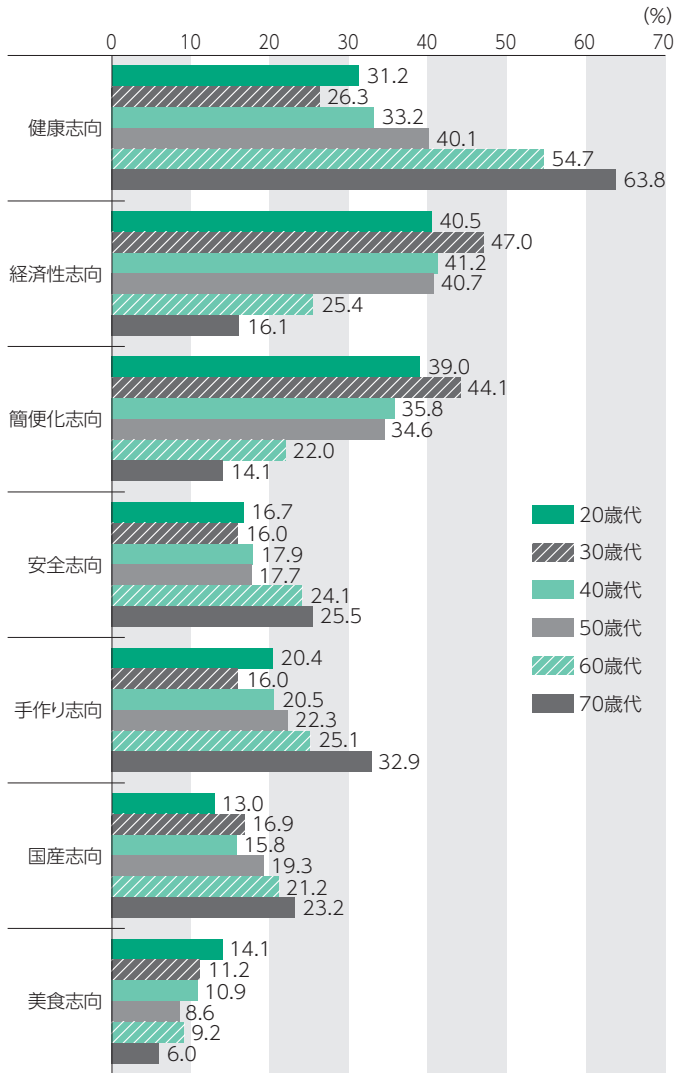


図1 食の志向の推移 (2つまで回答)

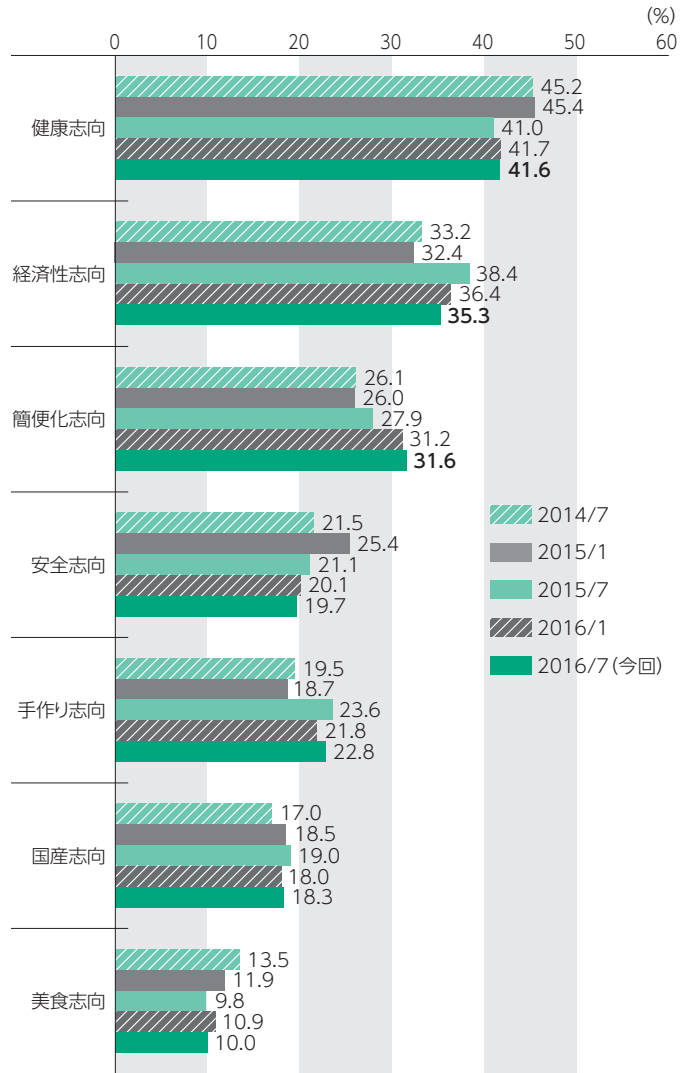


図4 食料品を購入するとき/外食するとき国産品かどうかを「気に掛ける」割合の推移

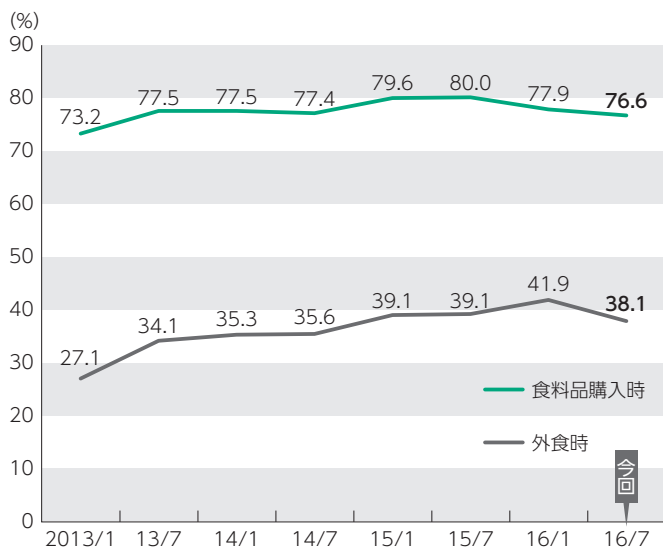
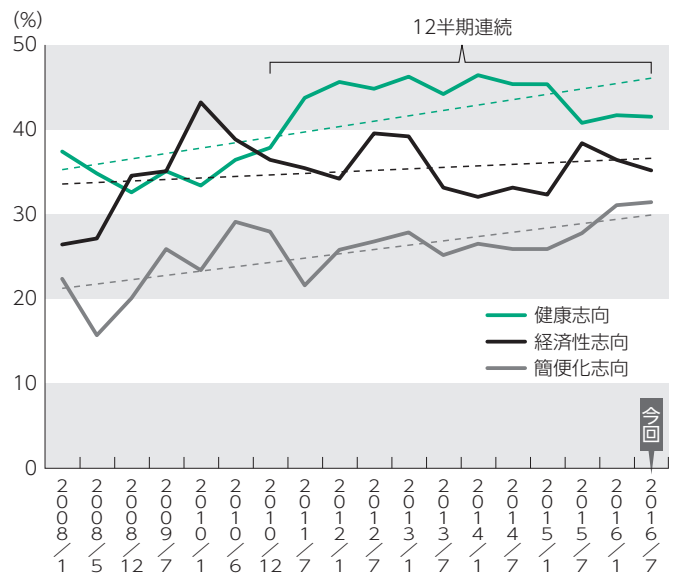


図2 「健康志向」「経済性志向」「簡便化志向」の推移



こと」としています(図8)。この傾向は若い世代で高く、年代が高くなるにつれ「栄養成分・機能成分」や「いろいろな種類・味のものを食べる」とへの関心が高くなる結果となりました。

また、最近の食費については、全体の三三・六%が「増えている」と回答しています。男女別に見てみると、「男性」二六・二%、「女性」三七・〇%と、特に男性よりも女性の方が「増えている」と感じる割合が高いという結果となりました。

次に、一日の実際の食事回数について聞いたところ、全体の七五・四%が「朝昼晩三回」としており、一四・〇%が「昼晩二回」という結果となりました。一日の理想とする食事回数については、「朝昼晩三回」が八二・四%となっており、理想と実際の間にある程度の乖離があることがうかがえます。

高齢世代は「パン」選択

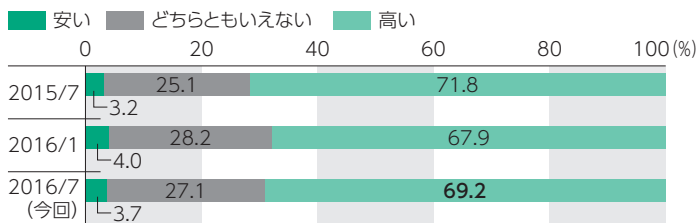
普段の朝食について、主にどのようなものを取っているか、主食・主菜・副菜・その他のものに分けて聞いたところ、主食では、「ごはん」が六二・二%、「パン」が五八・一%と、この二品目を中心であるという結果となりました(図9)。

年代別にみると、二〇歳代では

図5 国産原料の食品/輸入食品に対するイメージ

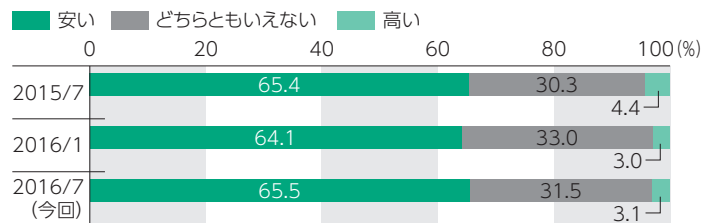
国産食品

●価格

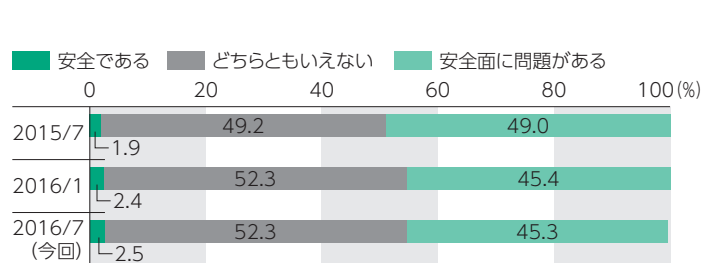
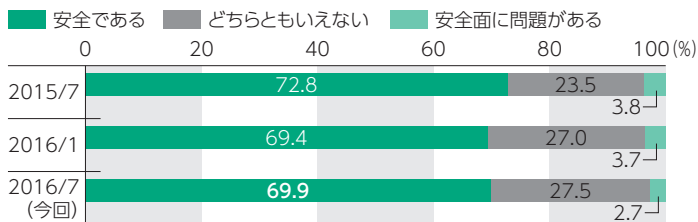


輸入食品

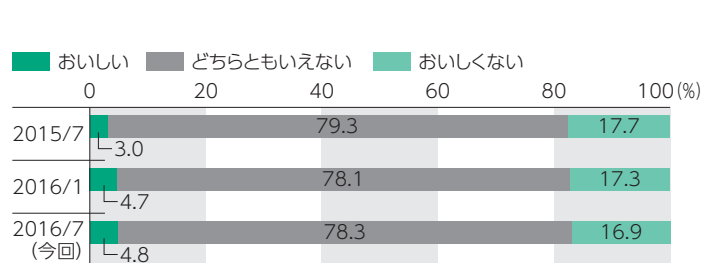
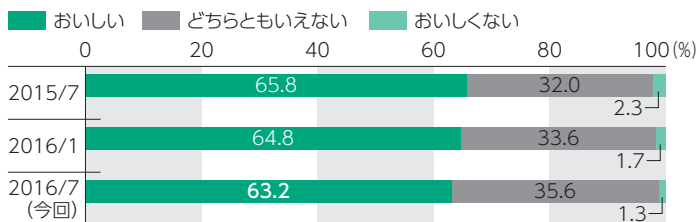
●価格



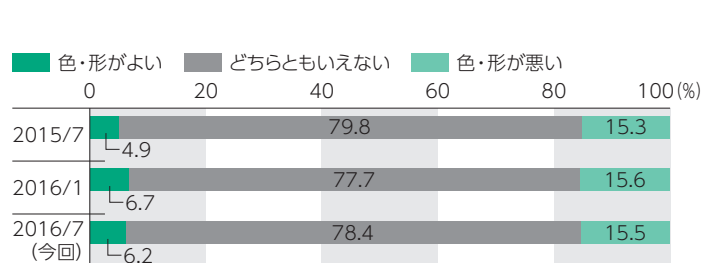
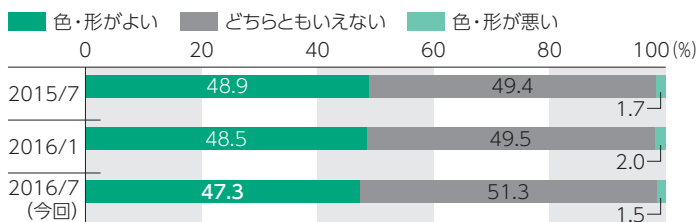
●安全面



●おいしさ



●見た目



「ごはん」が六三・三%で「パン」の四六・九%を大きく上回る一方、六〇歳代では「ごはん」より「パン」の方が高く、七〇歳代では「ごはん」と「パン」が拮抗するなど、高齢世代の方が比較的「ごはん」よりも「パン」を選ぶ傾向がみられました。昼食の主食では、「ごはん」が七二・二%、「麺」が四五・二%で、いずれも朝食と比べ割合が高まる一方、「パン」は三一・一%と大幅に低下する結果となりました。夕食の主食では、「ごはん」が八五・七%で性別、年代に関係なく、他の品目よりも顕著に高い割合となっています。

今回ご紹介した内容を含む本調査結果に関する公表資料は、当公庫ホームページに掲載しております。(https://www.jfc.go.jp/n/findings/investigate.html#sec04)

(情報企画部 五十嵐拓)

〔調査概要〕

● 調査対象

全国の二〇〜七〇歳代の男女二〇〇〇人(男女各一〇〇〇人)

● 実施時期

二〇一六年七月一日〜二二日

● 調査方法

インターネットによるアンケート

〔注〕図については、四捨五入の関係上、合計が一致しない場合があります。

図9 朝食で主に取っているもの(主食・複数回答)

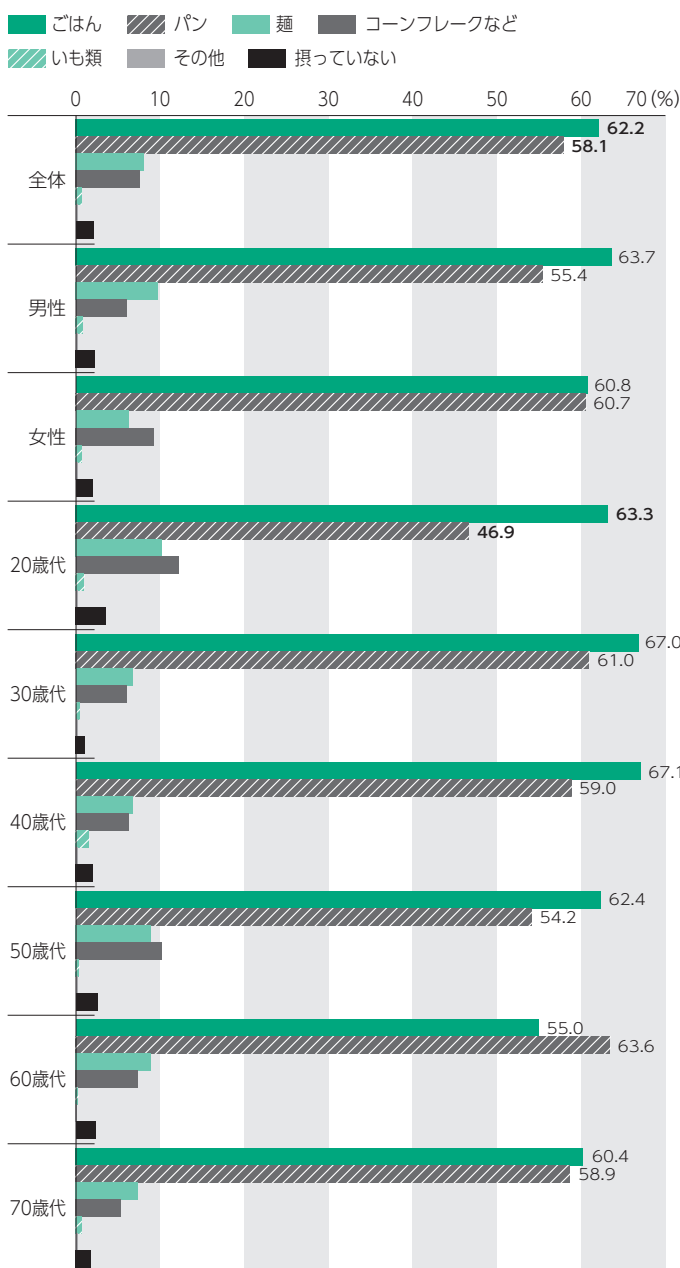


図6 国産食品の輸入食品に対する価格許容度

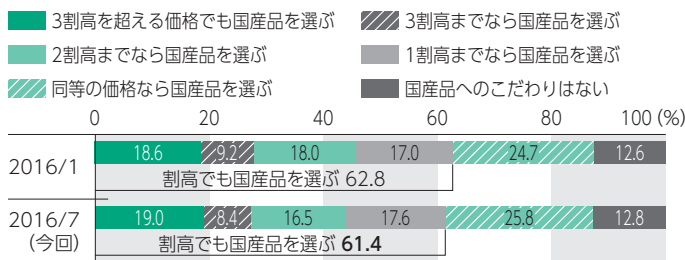


図7 日常生活において「食べること」への関心度

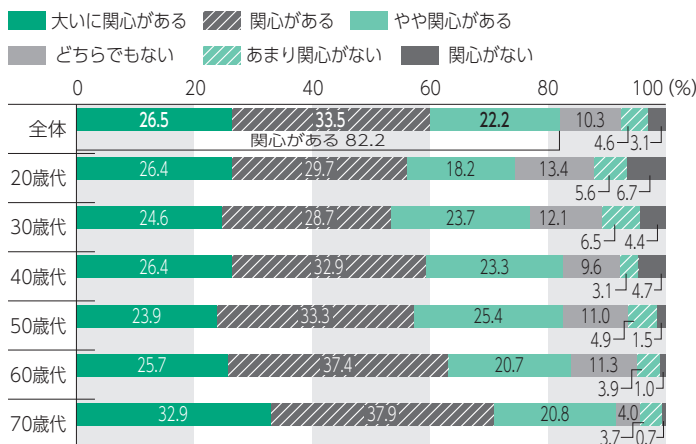


図8 「食べること」に関心がある理由(関心がある人)

